

## 若き友へ 98 - 01

経済学部教授 高島 均

## 夏休みに薦める本

夏休みは、日々の勉強に追われる事なく、自由に勉強出来る時です。この夏休みに、経済学は勿論、人生について考える為に、数冊の本を薦めます。このうち、少なくとも、経済学の本を1冊、その他の本を1冊読んで下さい。

1. 「オンリー イエスタデー」F.L.アレン著 ちくま文庫 (¥980)
2. 「ハート&マインド 経済学入門」林敏彦著 有斐閣 (¥1751)
3. 「消費者重視の経済学」伊藤隆敏著 日本経済新聞社 (¥1600 )
4. 「現代経済学への反省 対談集 」宇沢弘文著 岩波書店 (¥1800 )
5. 「平成不況の政治経済学」佐和隆光著 中公新書 (¥680 )
6. 「ワイルド・スワン」(上・下) ユン・チアン著 講談社 (¥1800, ¥1800 )
7. 「天と地」ベトナム篇(上・下)、アメリカ篇(上・下)  
レ・リ・ヘイスリップ著 角川文庫 (¥560, ¥640, ¥640, ¥640 )
8. 「妖精たちの夜」(I、II) ミルチャ・ユリアーデ著 作品社 (¥2884、 ¥2884)
9. 「女たちのデカメロン」ヴォズネセンスカヤ著 群像社 ( ¥2000 )

「オンリー イエスタデー」は、1920年代のアメリカの大好況が、1929年10月24日の株価の大暴落を契機に、突如崩壊し、世界不況に突入していくさま、そして、それからの回復過程が描かれている。今日の日本の状況を考えたとき、社会状況の類似性を含め、極めて興味深いものである。

「ハート&マインド 経済学入門」は、阪神大震災の経験を踏まえ、豊かさの本質に対する問いかけの中から、経済学が取り扱っているいくつかの問題を、簡明に説明しています。経済学に関心が持てなかった学生も、この本を読むと、経済学も結構面白いじゃないか、と思えると思います。

「消費者重視の経済学」の著者は、世界的に活躍している若手のマクロ経済学者です。そのマクロ経済学者が、「なぜ、日本は豊かになれないのか」という「私憤」をもって、現代日本が抱えている流通・金融・航空・通信の分野における問題点を、消費者の立場に立ったミクロ経済理論を駆使して、明快に論じたものです。経済理論は、その駆使の仕方の中にその人の価値観・立場が現れてくるものです。消費者という立場にたった時、例として挙げられているミクロ経済的な諸問題は、何の様に捉えられるのか、著者の若い情熱が溢れる好著です。

「平成不況の政治経済学」の著者も、経済学者の立場から、様々な社会批判を展開しています。この著書において、著者は、構造改革と不況対策が迫られている今日の日本の経済政策における思想を問うています。私は、必ずしも著者の主張に全面的に賛成するものではありませんが、漸新な切り口を示しているこの本は、一読に値します。

「ワイルド・スワン」は、著者であるユン・チアン（張戒）の祖母から3代に亘る年代記であり、現代中国に関する優れた記録となっています。著者は、1952年に、中華人民共和国四川省に生まれ、紅衛兵として文化大革命に参加し、その後、中国社会に失望してイギリスに渡り、現在ロンドン大学で教鞭をとっている人物です。この著書は様々な国の言語に訳され、日本を含め各国においてベスト・セラ - となりました。書評は、いずれも、著者の半生に焦点が与えられていますが、私は、娘であるユン・チアンを中国から脱出させながら、なお自分自身は中国に踏み留まり、中国社会の変革の為に、地道な人生を歩んでいる、著者の母親の生き方に共感を覚えます。なお、最近の重版は、3分冊になっているようです。

「天と地」は、巨匠オリヴァ - ・スト - ン監督のベトナム戦争物の完結編として日米で同時に公開された映画の原作です。ベトコンの女兵士として少女時代を過ごした著者フン・テン・レ・リが、運命の悪戯からベトコンから死刑判決を受け、アメリカに脱出し、その後、自らに死刑判決を下したベトナム労働党の支配する祖国に病院や学校を建設する為、イ - スト・ミ - ツ・ウエスト（East Meets West）という非営利団体を設立して平和の為に活動していく姿が、自叙伝として綴られています。

「妖精たちの夜」は、第2次世界大戦前後のルーマニアを舞台に、ルーマニア神話の妖精イレアナ・コスンジアーナと主人公の恋人イレアナをダブらせながら、時代の中で翻弄される人間を、存在と時間の桎梏として描いた、美しい文学であるとともに、極めて哲学的な文学です。是非一読を薦めます。

「女たちのデカメロン」は、出産の為に産科病棟に隔離された10人の女性が、慰みに、一人1日1つの物語をするという形で、合計100の現代ロシア（ソ連）のエピソードが綴られています。登場人物は、党のお偉いさんもいれば、反体制活動家、流れ者も出てくると言う様に、一見全くなんの共通性もない女性達ですが、物語の進行とともに、此等の女性の人生模様が絡みあってきます。カバア - には、「愛・嫉妬・レイプ・金・幸福.....」というスキャンダラスな文字が躍っていますが、むしろ、生きるということの意味を問いかけている

優れた叙事詩であり、特に、流れ者のジ - ナの身に起こった出来事の顛末には、心を洗われるものがあります。